

ドストエフスキーと現実：脱却と受容

近田, 友一

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 人文科学編 / 法政大学教養部紀要. 人文科学編

(巻 / Volume)

50

(開始ページ / Start Page)

21

(終了ページ / End Page)

34

(発行年 / Year)

1984-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00005220>

ドストエフスキーと現実

—脱却と受容—

近田友一

I

ドストエフスキーの刑期満了後のトヴェーリからの兄宛の書簡⁽¹⁾をよむと、彼が異常なまでに第二作『分身』に執着していたことがわかる。「イデーは冴えていたが形式で失敗した⁽²⁾」作品を彼はあえて全面的に改作しようとしていた。一八六一年頃のもの⁽³⁾と推定される創作ノートには新『分身』の断片が書きとめられている。

ゴリヤートキン氏、ペトラシエフスキーの会合へ。第二のゴリヤートキン演説する。フリーリエのシステム。高潔な涙。たがいに抱擁。第二のゴリヤートキン密告。

翌日、ゴリヤートキンはペトラシエフスキーの会合へ出かけ、第二のゴリヤートキンが百姓や庭番にむかって、フリーリエのシステムを説いているところに出くわし、密告すると通告。

第二のゴリヤートキンは陋劣の具象化。

作家自身の生涯を大きく変えた「事件」に主人公を設定するということは、彼の並々ならぬ執心を語っている。確かに流刑前の作品群のなかで『分身』はもっともドストエフスキー的な作品といえるであろう。彼の本音が出ていた小説といってもよい。ドストエフスキー文学の人物の原型——「夢想家」はゴリヤートキンによって定着されたのである。「夢想家」は現実からの飛翔を願望し、日常からの脱却を希求している。ゴリヤートキン氏の変身願望——他者への呼びかけが、第二のゴリヤートキンを生むが、その根柢にあるものは、現実への不信であり、現実の否定である。

処女作『貧しき人々』においても「夢想家」はすでに存在している。当時流行のセンチメンタル小説と小官吏小説を適度に混淆した結構をもった作品——『貧しき人々』は、「失敗すればネヴァ河に飛び込むつもり」だった作者の過度にまで鋭敏な計算のうえに立ってかかれた文章であったから、『分身』ほど明確ではないが、ジェーウシキンは単に虐げられた貧しい人間ではない。逃がれ得ない自分の日常生活に密着し、その生を肯定して生きているわけではない。彼の生活は偶然出現した遠縁の娘ヴァーリンカをよすがとした夢想である。ヴァーリンカとの交際は現実であって現実でない。少くとも彼にはその区別がついていない。ドストエフスキーの処女作の独創は、主人公のこの現実感覚にある。ヴァーリンカという少女は実在し、交信もできれば逢うこともできる。しかし、やはり彼女は彼の夢想のなかに住む人物である。ヴァーリンカは須臾の間ジェーウシキンの前に姿を現わし、去る。その間彼女を糧としてジェーウシキンは織った夢が彼の現実であり、生活であった。

おそらく、第一作をかきあげてからドストエフスキーは彼自身の「水脈」につき当ったことを知ったのであろう。現実には居ながら現実を無視し忌避する人間、自己自身のなかに「現実」を作り上げようとすする人間——「夢想家」を核とした小説を彼はかこうとした。『分身』はこの作家の意識の深化分だけ構想が明確になっている。

「夢想家」を生む素地はドストエフスキーの現実感覚の特異さにある。ゴリヤートキンも周知のように現実不信のうえに虚構の文学世界を築いた作家だが、ドストエフスキーよりは或る意味では「明解」であるともいえる。それはゴ

ーゴリの形而上的感覚の稀薄さのせいであるかも知れない。ドストエフスキーの現実描写には同時に不可視のものを描き出そうとする二重性のようなものがある。例えば、『分身』より二年後の『弱い心』にあらわれた描写――

ネヴァ河に近づいた時、私は一寸足を止め、凍ってもやっている遠方を、河に沿ってするどく見やった。霞んだ地平線の向うで燃え尽きようとしている夕焼の最後の赫紫色にそれは突然染めあげられた。夜が街に拡がっていて、雪が凍って盛り上がったネヴァ河の広大な河面には落日の反映とともに、あたり一面数限りない針のような霜の火花が撒き散らされていた。寒さは零下二十度にもなってきた……冷たい湯気が疲れきった馬からも走って行く人々からも立ち昇った。凝結した空気はごくわずかな響きにも震えた。両側の河岸に並んだ家の屋根からはみな、巨人のように煙の柱が幾筋も立ちのぼって、寒々とした空を、途中でもつれたり、解けたりしながら上へ上へと動いて行く。新しい建物が古い建物の上に立ちあがり、新しい街が空中につくりあげられたかのようであった……つまり、そこに住む人々、強者も弱者も、彼らの住み家も乞食の隠れ家も金殿玉楼もすべてこのたそがれの一刻には、ファンタスティックな、魔法めいた幻影に似通ってくる。そして次にはその幻が忽然と見えなくなり、湯気になって蒼黒い空に消え失せてしまうのだ。

いふならば、ドストエフスキーには、現実が二重にみえる資質があり、現実の向うにある「なにか」を信じ、見ようとする傾向がある。彼の文章がファンタスティックであるとすれば、それは現実世界の彼方の「なにか」へのドストエフスキーの根源的な希求である。『弱い心』は尠たる小品にすぎないが、彼の文学の主人公にこの感覚があらわれてきたことは注意しておきたい。それは、「夢想家」が自分の周囲の身近な現実だけでなく、大きな拡がりをもった世界に目を転じてきていることを意味しているからである。

このドストエフスキーの「原体験」は、十余年の歳月をへだてて流刑後のフェリエトン『ペテルブルクの夢』でくりかえし語られる。セミョーフスキー練兵場ですでに「死」を体験し、「金色の光」を見てしまった「夢想家」

が、同じベテルブルクの幻を語る執念は尋常ではない。彼はこの「原体験」を反芻し、自己の精神史の中での位置づけを慎重に行っている。かつて『弱い心』にはかかれなかった作者の心の内奥の言葉がフェリエトンの結びとしてあえてつけ加えられている。

急にになにか不可思議な想いが私のなかでうごめき始めた。私は身震いした。その瞬間、私の心には、力強い、これまで知らなかった感覚がみちあふれて、突然沸きたった血の熱い泉に満たされたような気がした。私はそのとき、今まで心の中でうごめいていたばかりで、まだ意味のとらえられなかった或るものを悟ったかのようであった。それはさながら、なにか新しい或るもの、全く新しい世界が見えてきたかのようであった。ただなにか漠とした噂によって幽かに知っていただけの、私には未知の新しい世界であった。まさにこの時から私は私の存在が始まったものと考えている……

後期のドストエフスキーの思考の原型が流刑以前の作品にすでに出来上がっていることには改めておどろかさるを得ないが、「ネヴァ河の幻影」はそのなかでも際立っている。流刑前直感的に漠然と感じていたものを、流刑後再確認し、掘り下げてゆくという形をドストエフスキーはとっているが、この「ネヴァ河の幻影」ほどはつきりしているものは他にない。ドストエフスキーはこの現実感覚を彼の認識の根柢をなすものとして再度とり上げ、深化させてゆく。「この時から私の存在は始まった」とは、彼のこの認識の自覚に他なるまい。

『弱い心』で直感したたそがれのネヴァ河の幻覚——不可視の世界は、ドストエフスキーが刑場で凝視した教会堂の丸屋根に反射する「金色の光」によって、いわば、「裏打ち」されたと言ってよい。以後ドストエフスキーは彼の認識の極点にこの「金色の光」をいだきつつけるようになる。『弱い心』の幻覚も「金色の光」と重なってはいじめて意味をもち、作家はフェリエトンで直接的にこの「原体験」をくり返し語ることになるのである。

その出発点から流刑後までドストエフスキーは「夢想家」に執心し、夢想の世界を語りつつけるが、それは彼に

とつては単なる夢想ではなく、現実以上の現実なのである。現実からの逃避、変身願望という形で始まったドストエフスキーの夢想の世界は、『弱い心』では現実の向う側になにかあるものを感じ、見ようとするものになる……ドストエフスキーの「夢想家」はこの地点でひそかに大きく変貌している。

II

ペテルブルクという都のもつ独自の幻想性を最初に指摘したのは、勿論、プーシキンだが、ドストエフスキーの資質はこの都市の特異性と適合し、そこに先人以上のものを見ようとしている。『弱い心』の一シーンは『ペテルブルクの夢』で執拗にくり返され、ネヴァ河の情景は、また形をかえて、ラスコリーニコフの視界のまゝにあらわれる。

彼が大学に通っていたころ、いつも——といってもおもに帰り途だったが——かれこれ百度もいま立っているこの橋の上に立ちどまって、このほんとうに壮麗なバノラマにじっと見入っていると、その度にある一つの漠とした解釈の出来ない印象に驚きをおぼえたものだった。この壮麗なバノラマからはいつもなんとも言えない冷気が漂ってくる。彼にとつては、この華やかな光景が啞で聾の靈にみちているのだった。彼はそのたびにこの陰気な謎めいた印象に驚き、自分を信じられないまま、その解答を将来にのばしてきた。そしていま彼は突然この以前に解き得なかつた疑問をはっきりと思ひ出した。(『罪と罰』第二篇第二章)⁽⁶⁾

『ペテルブルクの夢』の情景とラスコリーニコフのネヴァ河のバノラマは時間的に多少ずれはあるものの、ほとんど同じシチュエーションを描いている。それは、いわば、現実と彼方との接点——現実の裂け目、或いは、現実の境界の果——に触れている部分だが、前者では、漠然としたままであった「もの」を後者では、冷気を吹きかけてくる「啞で聾の靈」と定義している。それは単なる無ではなく、明らかに虚無である。捉えどころのない、一切

人間とのかかわりを峻拒する「もの」——無気味な底なしの空虚をドストエフスキーは示そうとしている。

スヴィドリガイロフは「永遠」を「田舎の湯殿みたいな四隅に蜘蛛の巣のはった煤けたちっほげな部屋」のようなものと語っているが、これもラスコリーニコフの見た虚無を裏側から表わしているのであろう。蜘蛛の巣さえ手がかりにしようとするのがスヴィドリガイロフの真意なのであろうか。「もう少し気安めになるような公平な考え」はないのかと詰問されたスヴィドリガイロフのラスコリーニコフに対する冷然たる答のなかに彼が凝視していた虚無の深さがうかがえる——「もう少し公平な？ そりゃわかりませんよ。ことによったら、これがあなたの仰言る公平なのかも知れませんかね。それに私は必ずわざとでもそうしたいんですよ」⁽²⁾

スヴィドリガイロフは、ラスコリーニコフが「公平」の意味を解しないことに苛立つ。同じ「もの」を凝視していながら、ラスコリーニコフは「蜘蛛の巣」の意味を感じしていない。ドストエフスキーはそこに二人の差を描き出そうとしているのであろう。ラスコリーニコフがガス燈の光に映えて真直に降るぼた雪を語り、生へのきっかけをつかめたのも、「蜘蛛の巣」の意味がわからなかったお蔭かも知れない。スヴィドリガイロフは「蜘蛛の巣」の意味を知りすぎ、そのまま「外国」へ旅立つ。

『弱い心』、『ペテルブルクの夢』のドストエフスキーの「原体験」は、スヴィドリガイロフで一つの極北に達するが、次作『白痴』でその対極にムイシキン公爵のスイスの山中の挿話をおいているのは、その体験の重層的構造を物語っている。

太陽はさんさんと輝き、空はあくまで蒼く、こわいような静けさです。そんなときです。どこかへ行きたいという気持になったのは。もしそのまま真直ぐに、ぐんぐんどこまでも歩いて行ってあの地平線と空が接している向う側まで行けたら、そこでは、一切の謎が解き明かされていて、われわれの生よりも千倍も力強く活気に溢れた新しい生を見出すことが出来るのだ、とそう思われたのです。ナボリのようなあんな大きな町が絶えず目に浮かびました。そこにはいつも宮殿と、ざわめきと、どよめきと、生命があるのです。『白痴』第一篇

第五章⁽⁸⁾

メイシキンがここで体感しているのは、いわば、実在ともいふべき一つの絶対の世界であろう。メイシキンは、一切の存在の根柢に在るものとして「それ」に触れている。あるいは、メイシキンだから触れたといふべきであらうか。

「一切の謎が解き明かされる」地点は、セミヨーノフスキー練兵場でドストエフスキーが見た教会堂の丸屋根の「金色の光」の謎に重なる。刑場で凝視しつづけた光はこの世界と彼方の世界との接点であり、以後ドストエフスキーは、終生、この「金色の光」を意識しつづける。この接点の先に「一切の謎が解き明かされる」地点が在ると彼は信ずる。それは、ラスコーリニコフ、スヴィドリガイロフの覗き見た虚無をも含みながら、なお、万物を包みこむ無——その自己否定として存在を在らしめている非在——であろうか。

『白痴』ではメイシキンと対蹠的立場に位置しながらIPPポリートが、この存在を在らしめている「もの」を気にしている。余命二、三週間と宣告されているこの少年は、世界の「調和」とは何かという間に悩まされつづける。死刑囚ドストエフスキーが「金色の光」の謎を解くことをせき立てられたように、IPPポリートも一刻も早くこの問を解かねばならない。

陽光を浴びて飛びまわっている一匹の蠅すらその所を得て「宇宙の調和」に参加しているのに、何故自分だけが「除け者」なのか。その「調和」のために何故他ならぬ私の生命が必要なのか。そういう理不尽ともみえる形で存在者を存在させている「もの」は何なのか——IPPポリートは自分の生命と引きかえにこの問を解こうとする。IPPポリートは、彼の焦燥にもかかわらず、問には沈黙しかかえてこないことを知っている。「マイエルの壁」はその象徴である。病気の間中、所在もなく眺め暮したマイエル家の壁は、そのしみの小さな模様の一つ一つにいたるまで彼の脳裡に焼きついている。それは意味を求めるIPPポリートに答える無意味そのものである。

人間が宇宙の調和からはずれていないかというのは十七歳のドストエフスキーの感覚であり、認識であ

った。⁽⁹⁾彼はこの悩みから文学青年の道を辿ってゆくことになる。この認識は彼の生涯の原点であり、三十余年の歳月をへて漸くイッポリートの「告白」に再び姿をあらわす。ドストエフスキーの間は、飛びまわっている一匹の蠅としてあらわされると同時に、「マイエルの壁」をさらに加えることによって増幅される。

そらだ、あのマイエルの家の壁はいろんなことを語り伝えることが出来るはずだ！あの壁にぼくはいろんなことを書きとめたのだ。あの汚れた壁にぼくが諳んじていないようなしみなどありはしない。呪われた壁よ！(『白痴』第三篇第五章)⁽¹⁰⁾

「宇宙の調和」にくみこまれていた蠅の命とはずれているイッポリートの生、余命わずかであるはずの彼の生命と無表情に存在しつづけるであろうマイエルの壁。イッポリートはマイエルの壁のしみに自分の生命を刻みつけようとする。自分の死後も確実に存在しつづけるであろう壁がイッポリートを苛立たせ、それがまた彼の現在の生の確認につながる。マイエルの壁を敵視することによってイッポリートは存在している。自分が「宇宙の調和」からはずれて、この世界に無意味に投げ出されている「意味」をマイエルの壁と対峙することによって探ろうとする。彼は壁を忌々しく感じながら、それから目をそらすことが出来ない。彼はそこに彼の存在そのものの姿を見据えている。彼の存在の形は、つねに壁との対比の中にある。

マイエルの壁は、イッポリートの存在の形をうつす「鏡」であると同時に、その形を変えさせてゆく「日常性」の象徴でもある。暗愚ともみえる日常性は、無感動に、しかし、確実に、彼の生を徐々に侵してゆく。ドストエフスキーの主人公たちはその初期より、日常性からの脱出、飛翔に執心したが、イッポリートに至って日常性そのものの姿が、観念ではなく具体的に描かれるようになってくる。それは人間を囚えて寸刻も放そうとしないもの、その無意味ともみえる姿でそのなかに一切の存在物を無感覚に平然と包みこんでしまうものである。日常性の何食わぬ顔の背後には冷然たる自然律が支配していることをイッポリートは感知するが、この日常性に対する彼の認識は

先人たちをはるかに凌駕している。

ドストエフスキーはこのイッポリートの認識を七年後、『未成年』のアルカージイに継続させる。アルカージイには、勿論、死を凝視する病者の感覚はない。しかし、彼の認識にはイッポリートと同じ感覚が流れ、日常性への理解はさらに深化している。

アルカージイはげしい熱病に冒され、九日間の昏睡状態からやっと意識を回復する。今まで彼が何気なく見逃していたものが、一つの意味をもって彼の目に映じてくる……同一時刻、同一場所に確実に射してくる陽光、自然律の支配する何の変哲もない日常性に主人公は苛立つ。予想通りになることの愚劣さ、必らずそうなるということの無意味さをアルカージイは異常なまでに感じてしている。

意識を回復して四日目の午後二時をまわったころであった。わたしは寝台の上に横になっていて、そばには誰もいなかった。明るく晴れた日で、三時が過ぎて日がかたむきかけると、赤い夕陽が部屋の壁の隅に斜めにさしこんで、そこが明るい点となって燃え立つのを、わたしは知っていた。わたしはこの数日の経験でそれを知っていた。そしてその現象が一時間後にならずおこるということが、いやそれよりもそれをわたしは確実に予知していたということが、わたしをいとも立ってもいられぬほどに苛立たせた。わたしはげしく全身をふるわせて寝がえりをうった。(『未成年』第三篇第一章⁽¹⁾)

アルカージイの理解する日常性は自然律そのものと言ってもよい。彼の人間としての存在を根本から律している自然律にアルカージイは抵抗をおぼえる。究極的には自由をもたない人間存在としての自己と、人間の本来的な自由はどうかかわるのか……アルカージイは彼の希求する「自由」が日常性のなかで囚われてゆくことを感ぜざるを得ない。彼にはそれが頼の種なのだ。「ロスチャイルドになった後一切を放擲し絶対の自由を獲得する」にしても、根元において絶対の自由が保証されていないかぎり喉もとをおさえられている「自由」でしかない。

現実の世界のなかで——自然律の支配する日常性のなかで、そういう形で生かされている自己の存在を受容するか否か、これがイッポリートにもアルカージイにもつきつけられた間である。

キリーロフはその「聖なる病」ゆえに、日常性の裂け目、「永遠の時間」を見、日常性から飛翔して絶対なるものにつらなるうとする。発作の瞬間彼の時間は停止し、彼の立っている場所はこの世ならぬ地点に瞬時にしてつながら、キリーロフもまた、それが常人には難しいことを知っている。そのためには人間の「肉体的変化」が必要だと彼は感じていた。

キリーロフと同じ宿痾を背負ったドストエフスキーは、キリーロフの境地を理解しながら、また、「肉体的変化」を必要とする彼の認識にも共感する。もし、「肉体的変化」が不可能だとしたら、日常性の世界——自然律の支配する世界で、相対的自由のなかで、人はいかなる存在の形を見出して行ったらよいのか——作家はこの最後の間をゾシマに収れんさせようとする。

III

ゾシマの精神形成には三人の重要な人物がいる——母、従卒アフナーシイ、夭折した八歳年上の兄マルケールである。

母との思い出は彼の八歳の時の神聖週間中の教会の礼拝の記憶につながる——明るく澄んだ日。幼いゾシマに添って一心に祈る母。香烟からはかくわしい紫の煙がゆっくりと立ちのぼり、円天井の小さな窓から降りそそぐ光の中に融けこむ……ゾシマはこの情景を「神の言葉の最初の種子の自覚」と語っている。ゾシマは母とともに祈った幼い自分の姿にこの世界に在ることの原点を見、現実世界を超えた一つの感覚を得ている。母はゾシマが士官学校在学中に世を去るが、この「記憶」は後年の信仰者ゾシマ形成の根柢になっている。

従卒アフナーシイの存在は、この「記憶」を一時大きくそれた青年ゾシマの軌跡を再び元に戻したことに意味をもつ。

夜会帰りの勢いで青年将校ゾシマはアフアナシーにむかっ腹を立て、力まかせに二度も彼の顔を殴打する。直立不動のまま、何の抵抗もみせず殴られ放しの従卒の姿にある精神的震憾を覚えたことが、ゾシマの精神的な一大転機となる。従卒が彼のなかの「神」を呼びさましたというべきことでもあろうか。

ゾシマ青年に精神的転機が訪れると同時に彼は幼年時代を思い出し、夭折した兄マルケールのことが鮮明に彼の脳裡によみがえる。

マルケールの記憶はゾシマの心を決定的に変える要因となる。新時代の思想にかぶれ、急進主義者を気どっていたマルケールは、死病にとりつかれてから全く人間が変わってしまった。過激な否定からこの世の一切を肯定し、受容しようとする人間に変貌する。人はすべてのものに対して罪があり、この世のすべては美しいというマルケールの考え方の意味をゾシマはアフアナシーを契機として漸く理解した。

ドストエフスキーがマルケールをIPPOLITOと同じシチュエーションにおいたのは偶然ではない。IPPOLITOは「宇宙の調和」からはずれているという意識に苦しみ、この世に意味もなく投げ出されていると感じている……余命二、三週間という確実な時間の中で自分だけがその存在を抹殺されるという被選別者としての存在の意味を捉えることが出来ない。「宇宙の何のためかわけのわからないプラス、マイナス」の故に自分の生命が必要だということをIPPOLITOは承服しない。

マルケールは投げ出されているという認識をすてて、この世に生かされているという感覚を採る。二人の少年はこの点で全く対蹠的な地点に立つ。マルケールは死を前にして直感的にこの宇宙との連帯感覚を得るが、ゾシマは老年に至って亡兄の感覚を悟り、その感覚を客観化することに腐心する。

ゾシマの世界観は、生かされて「在る」ということに尽きる。それは実在のあらわれとしての現実世界の受容であり、現実の向うにある「もの」——実在との一致を希求する感覚であらう。

IPPOLITO、アルカージイは、無意味に凡庸にくり返されてゆく「日常」に苛立った。正確な毎日の時間の推移に人間をしばる自然律を見、その根柢に虚無を認めた。一方ゾシマは、そこに一点の揺るぎもない宇宙の運行を

知覚し、その根元に「絶対者」を見ようとする。

人間存在は、実在の自己表現としての存在か、単にこの世界に投げ出されているにすぎない存在者か——ドストエフスキの *Pro et Contra* はここに集約される。

ゾシマの世界は実在の表現としての現実であり、人はこの世界とつらなっている他界に達しようと考え、いわば、「重層の世界」である。そしてそれは究極的には一つの世界なのである。人は平常はその一部分を見ているにすぎないが、あるシチュエーションのもとではその全貌を垣間みることができ、その瞬時の感覚を定着しようとするのが信仰というものだとは彼は信ずる。世界は一つの円なるものであると考えれば、人はその下半分で生き、その世界を知覚しているにすぎない。円なる世界の認識がなければ、投げ出されているという感覚をもつのは必然であらう。円なる世界との連帯感——未知の上半分の認識が人間存在の唯一の支えになる。ゾシマの信仰はあげてこの認識の獲得にかかっている。

……すべてのことは大海のようなものであって、ことごとく流れ集まり、相接しているが故に、一端に触れば世界の他の一端にひびくのである。

……この地上においては多くのものが我々の目から隠されているが、その代り我々は他の世界——天上の、より高い世界と生きたつながりを有しているという神秘的な貴い感覚が与えられている。それに我々の思想感情の根元はこの世になくして、他の世界に存するのである。哲学者が事物の本質をこの世で理解することが不可能だと言っているのはこの故である。(『カラマーゾフの兄弟』第二部第六篇三章 (J))

ゾシマは人間と宇宙との対立関係を消すことによって絶対者に触れようとする。すべての現実、地上の一切の存在は、実在の表現である。絶対者の自己表現として世界は在る。アファナーシイもマルケールもゾシマもすべて等しい絶対者の表現点である。

自己も他者も一切の衆生は生かされて「在る」。人間は「孤児」ではなく、円なる世界にたつらなっている。十七歳のドストエフスキーの認識は、ここで漸くその最深部に達する。

教会堂の丸屋根の金色の光、ネヴァ河の幻影、ラスコーリニコフのネヴァ河のパノラマ、スヴィドリガイロフの蜘蛛、ムイシキンの山中の想い、イッポリートの蠅のコーラス、マイエルの壁、スタヴローギンの黄金時代、キリロフの絶対調和の時、アルカージイの夕陽の移ろい——すべてを含んだゾンマの認識は、作家の生の終りとともに、その円なる世界を閉じようとする。

注

(1) 一八五九年十月一日付兄ミハイル宛書簡——「この序言つぎの改訂版は全く新作、ともいうべき価値があります。彼らもついに『分身』のなんたるかを悟るでしょう。ぼくは世の人々の関心を大いにそそるものと期待しています。一言にして言えば、ぼくはすべての人々に戦いを挑むのです(要するに、もし今『分身』を改訂しなかったら、一体いつそれをする時があるのでしょうか? なぜぼくはあの素晴らしいイデーを失わなくてはならないのでしょうか。あれは社会的重要性から言っても実に大きな典型で、ぼくがその最初の予言者だったのです」

A・ドリーニン編 ドストエフスキー書簡全集 第一巻 二五七頁 国立出版所 モスクワ・レニングラート 一九二八年

(2) 『作家の日記』一八七七年十一月号第一章——「この小説は完全に失敗してしまつたけれどイデーは冴えたもので、イデーの点であればほとんどなものはその後自分の文学で試みたことがないほどである。しかし、この小説の形式はまったく失敗であつた」

V・トマシェフスキー他編 ゴス・イズ版ドストエフスキー定本全集 第十二巻 『作家の日記』 二九七〜八頁 国立出版所 モスクワ・レニングラート 一九二九年

(3) V・シチエルピナ他編『未刊のドストエフスキー』第二ノート 一七八頁 「ナウカ」出版所 モスクワ 一九七一年

(4) V・バザーノフ他編 ドストエフスキー三十巻本全集 第二巻『短篇・中篇』 四八頁 「ナウカ」出版所 レニング

ラート 一九七二年

- (5) 同前全集 第十九卷ハ論文・小品V 六九頁 同前 一九七九年
- (6) 同前全集 第六卷ハ罪と罰V 九十頁 同前 一九七三年
- (7) 『罪と罰』第四篇第一章六 二二二頁
- (8) 同前全集 第八卷ハ白痴V 五二頁 同前 一九七三年
- (9) 一八三八年八月九日付兄ミハイル宛書簡——「……人間の宿命として与えられている状態はただ一つです。人間の魂の雰囲気は天と地の合流から成っています。人間はなんと理法にはずれた子供でしょう。精神的自然の法則が破られているのですから……この世界は、罪深い想いに曇らされた天の精霊のための煉獄のような気がします。この世が否定的な意味をもったので、高遠で優美な、精神的なものから皮肉が出て来たように思われます。もしこの画面の中に、全体と効果も思想も煩たない人間、つまり、全く関係のない人間が飛び込むとしたら、どうでしょう？ 画面は台なしになって存在することが出来なくなりませう！」
- 同前書簡全集 四六頁
- (10) 同前全集 第八卷ハ白痴V 三二六頁 同前 一九七三年
- (11) 同前全集 第十三卷ハ未成年V 二八三頁 同前 一九七五年
- (12) 同前全集 第十四卷ハカラマーゾフの兄弟V 二八九頁 同前 一九七六年